

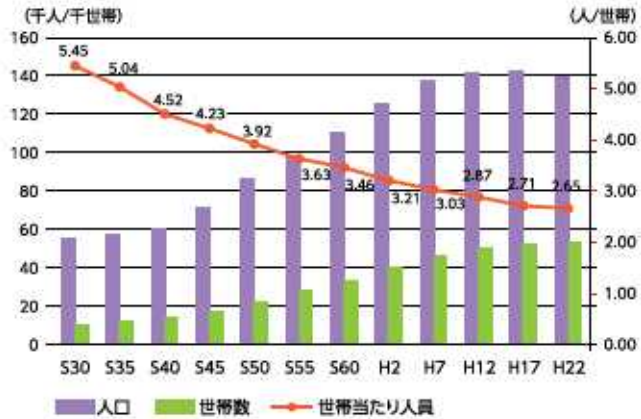
## 2

## 青梅市の現況動向

### (1) 人口・世帯数等

平成22年の人口は139,339人、世帯数は52,544世帯、1世帯当たり人員は2.65人/世帯です。人口はこれまで増加傾向にありましたが、平成22年に初めて減少に転じました。世帯数は増加傾向にあります。1世帯当たりの人員は減少を続けています。

図1-5 人口・世帯数・世帯当たり人員

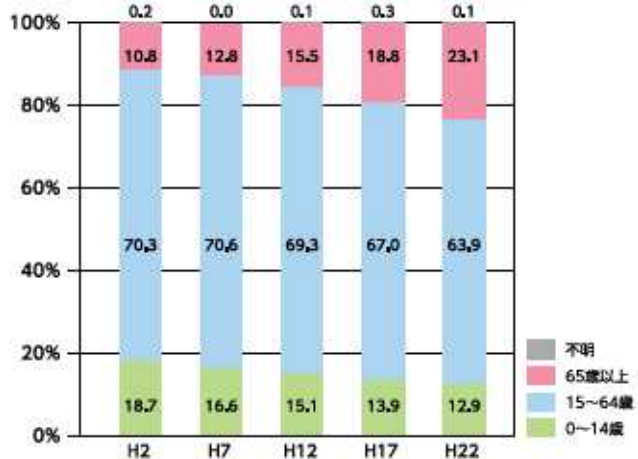


資料：国勢調査（総務省）

年齢3区分人口比率の推移では、老年人口比率の増加、生産年齢人口比率や年少人口比率の減少が続いています。社会増の傾向は続いているものの、高齢者層の転入によるところが大きく、若年層は転出超過となっています。高齢者層の転入は、市内に多く立地する高齢者施設への入所の影響とみられます。

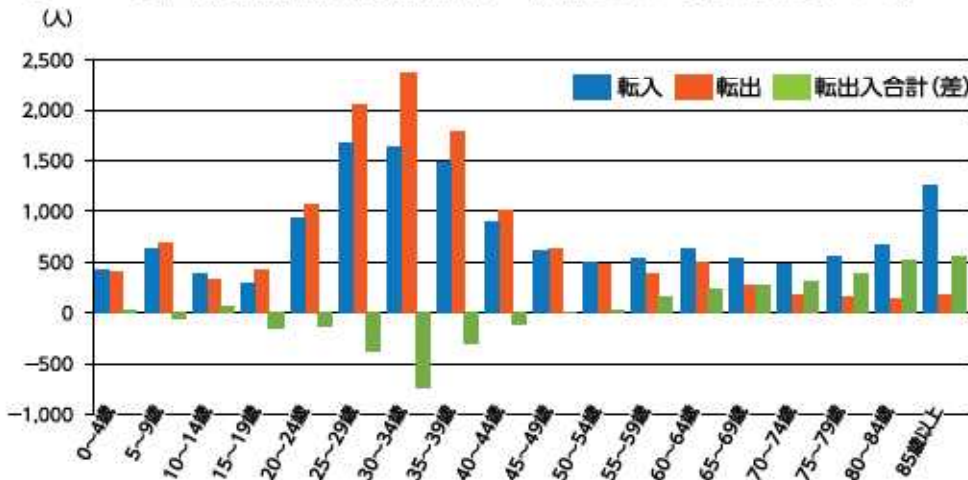
また、自然減が社会増を上回り人口減少に転じましたが、東部の土地区画整理事業\*が行われた新町地区では人口増加傾向にあります。一方、山間部や中心市街地の青梅駅周辺地区では人口減少や高齢化が進んでいます。

図1-6 年齢3区分別人口構成比の推移



資料：国勢調査（総務省）

図1-7 年齢5歳階級別転出入状況（平成22年常住者の5年前の居住地による）



資料：国勢調査（総務省）

图1-8 地区别人口增减率(平成22年/平成12年)

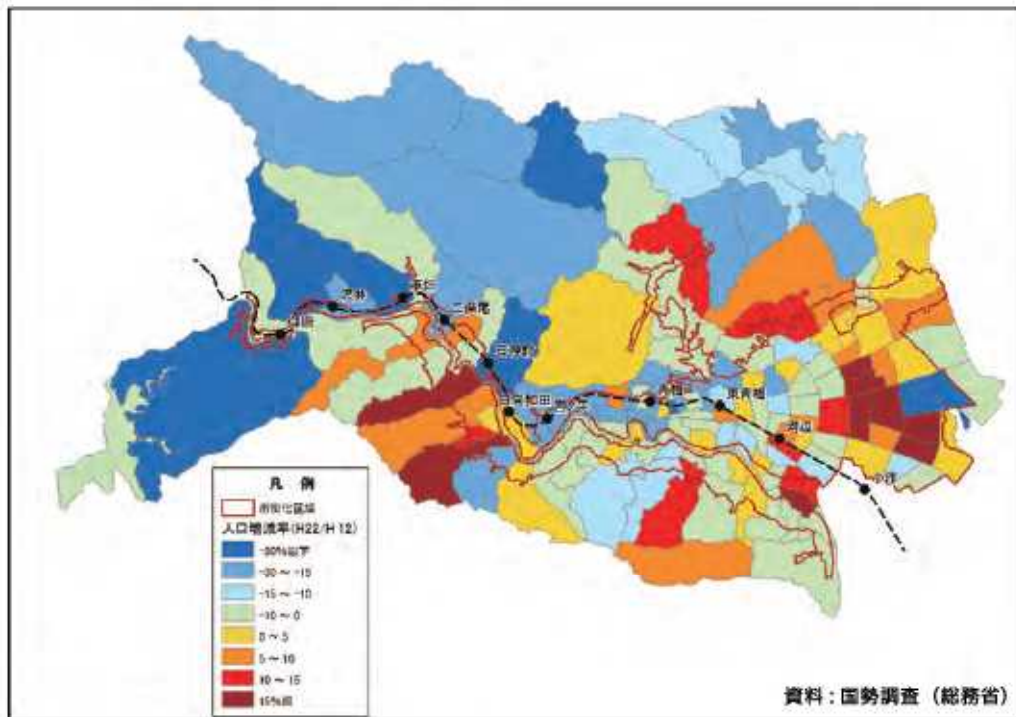
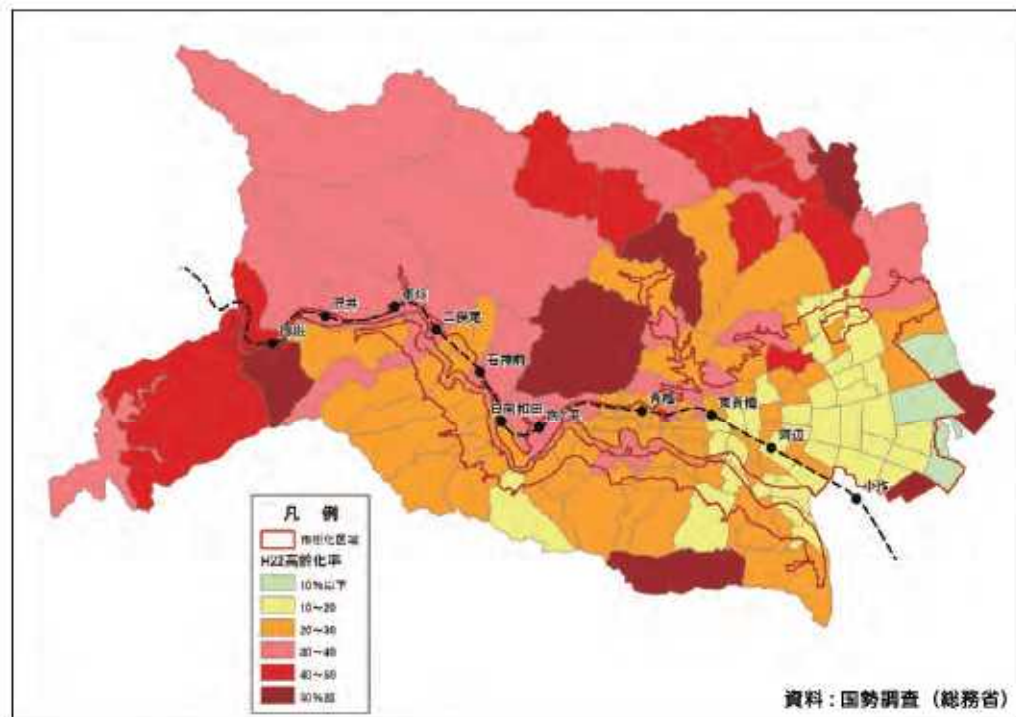


图1-9 地区别高齢化率(平成22年)



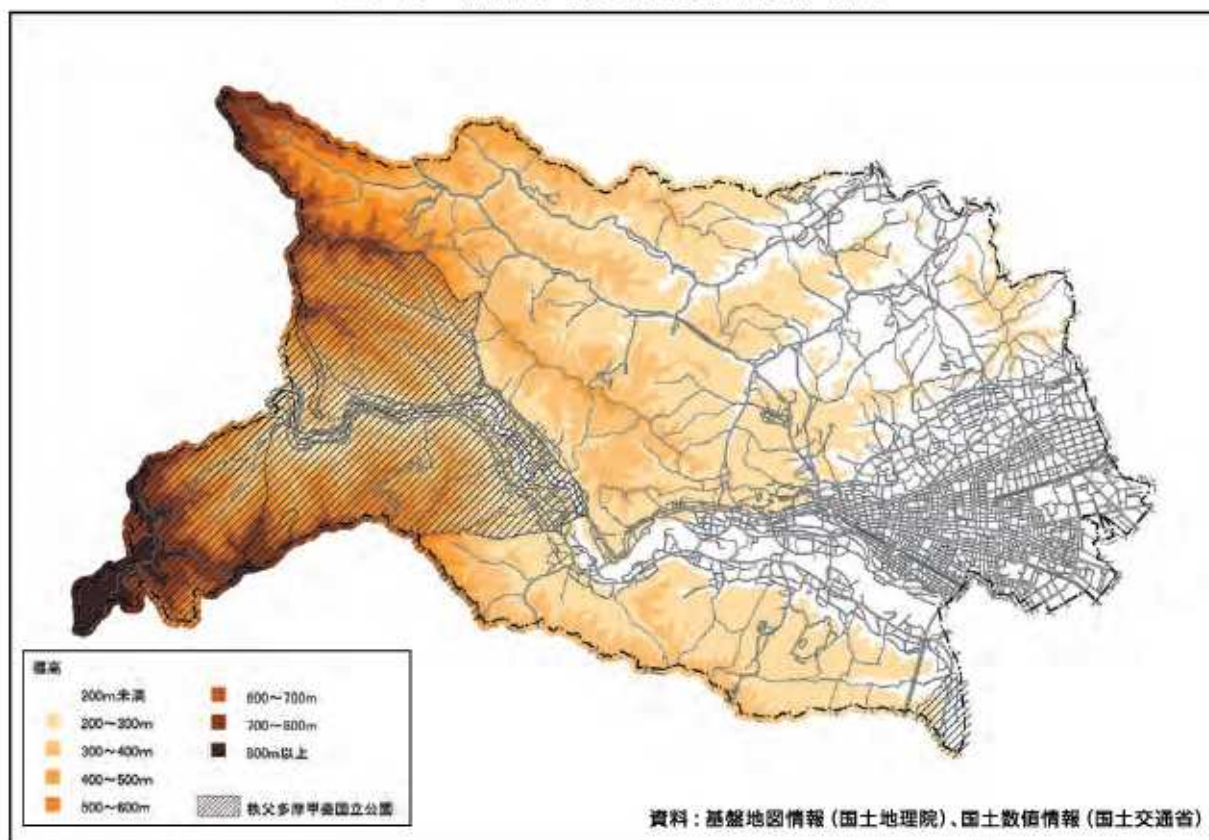
## (2) 土地利用・建物状況等

### 【地形・地質】

本市は、関東山地と武蔵野台地が接続するところに位置しています。西部の山地は、標高900～1,000mの高地から東に向けて高度を下げて、標高300m付近で、丘陵地となっています。丘陵地は、北部に青梅丘陵・霞丘陵・小曾木丘陵など、南部に長淵丘陵が位置し、その間を扇状に台地が開けています。台地の中央を流下する多摩川の両岸は浸食が進み、その上に河岸段丘が形成されています。また、霞川周辺には低地が分布しています。

市域の海拔最高点は鍋割山の1,084m、最低点は成木川河床の103mで、高低差約1,000mと起伏に富んでいます。地質は、山地の大部分が秩父古生層からなっており、丘陵地や台地においては、上部層をいわゆる関東ローム層が覆い、その下に砂れき層が広がっています。

図1-10 青梅市の地形と秩父多摩甲斐国立公園



### 【水系】

本市の水系は、市域中央を流れる多摩川などの多摩川水系と、北部を流れる霞川、成木川などの荒川水系により構成されています。このうち、一級河川は8本で、多摩川水系が3本（多摩川・大荷田川・鳶巣川）、荒川水系が5本（霞川・成木川・黒沢川・北小曾木川・直竹川）となっています。

## 【自然環境】

市域西部の御岳山や高水三山をはじめとした山々の一部は、秩父多摩甲斐国立公園に指定され、自然環境の保全が図られるとともに、市内外から多くの登山やハイキングを楽しむ人々が訪れています。また、それらの山地を水源とする多摩川水系や荒川水系の多くの河川が流れ、多摩川については、上流域では自然豊かな溪流の様相を呈し、中下流では広い河原と河岸段丘が形成され、貴重なレクリエーションの場としても親しまれています。東部の扇状地に広がる市街地を包み込むように分布する丘陵地は、かつては里山として人々に利用されてきましたが、生活様式の変化などにより放置され荒廃しつつありましたが、近年、里山のもつ生物多様性<sup>\*</sup>や景観など多様な価値が見直されはじめました。

## 【土地利用・建物状況】

市街化区域は、青梅、東青梅、河辺の各駅周辺の複合市街地と東部の工業団地のほかは、比較的低密度の住宅を中心とした市街地が形成されています。また、多摩川沿いにはマンションが立地し、崖線緑地<sup>\*</sup>などの周辺景観との調和が課題となっています。

商業地は、河辺駅周辺に一定の集積がみられますが、近年は東部の青梅街道沿道などのロードサイド型店舗<sup>\*</sup>や青梅インターチェンジ周辺における大型店の立地が顕著となっています。青梅、東青梅、河辺の各駅周辺の中心市街地には、業務・商業施設、官公庁施設、医療施設、文化・スポーツ施設が立地しており、本市の核となる都市機能の集積地となっています。

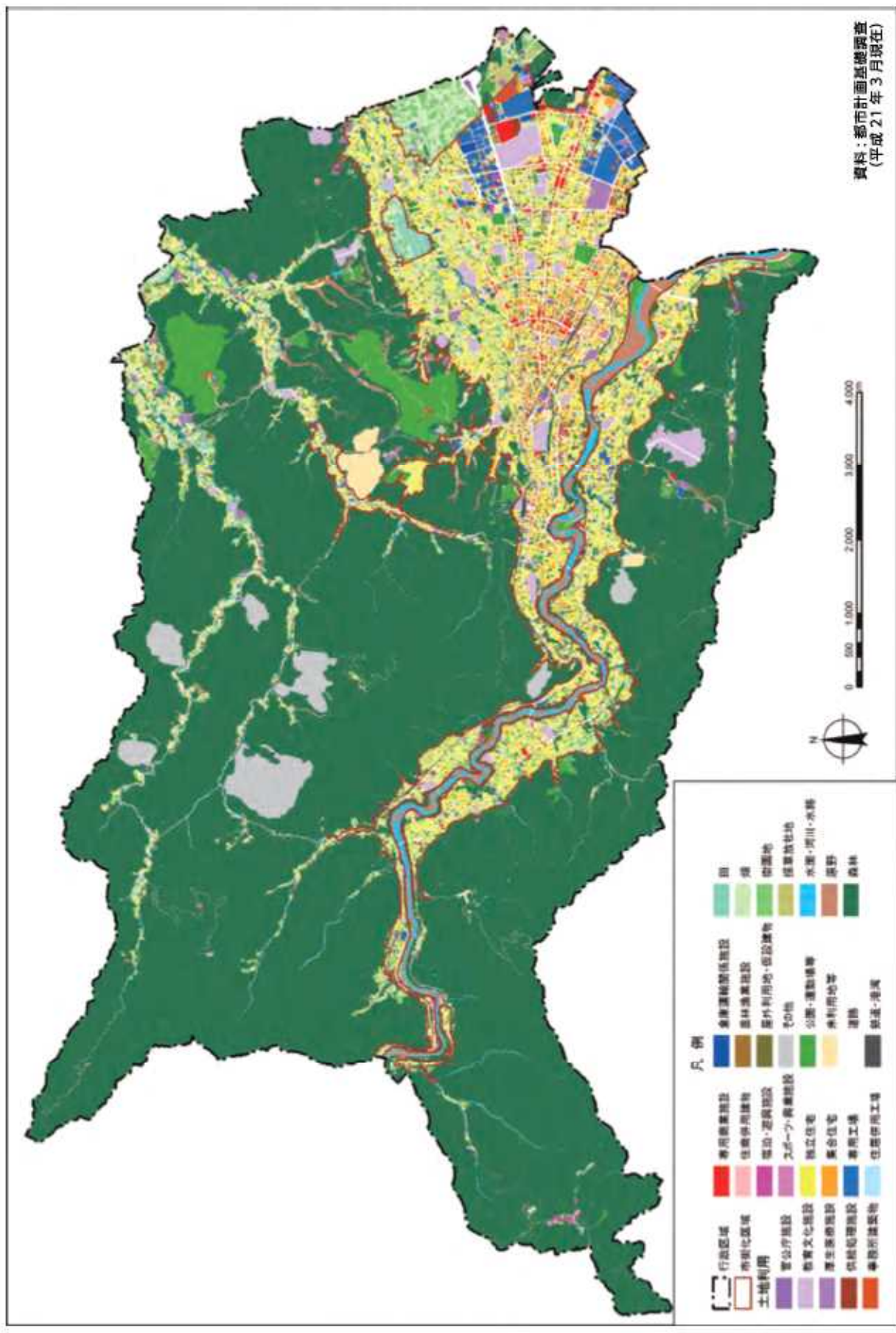
市街化調整区域は、採石場やゴルフ場などが多く点在しています。北東部の小曾木街道、成木街道沿いに、まとまった集落が形成されているほかは、特別養護老人ホームや関連の病院が多く分布しています。

また、霞水田をはじめ東部には、まとまった農地があります。



今井から西を望む青梅の扇状地

圖1-11 土地利用現況圖



### (3) 産業

#### ア 商業(小売業・卸売業)

小売業、卸売業ともに年間販売額は減少傾向にあり、小売吸引力も低下しています。  
 東部でロードサイド型店舗\*や大型店の立地が進む一方、中心市街地における小売業の衰退が進んでいます。

図1-12 小売業の事業所数・従業者数・年間販売額の推移



図1-13 卸売業の事業所数・従業者数・年間販売額の推移



図1-14 多摩地域の小売吸引力

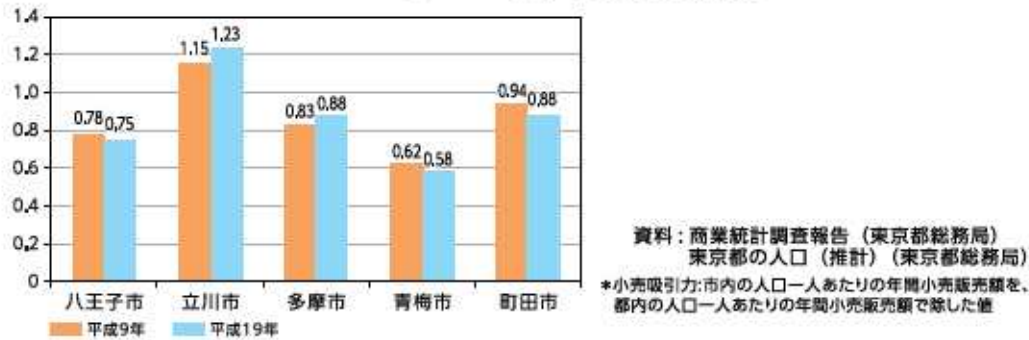
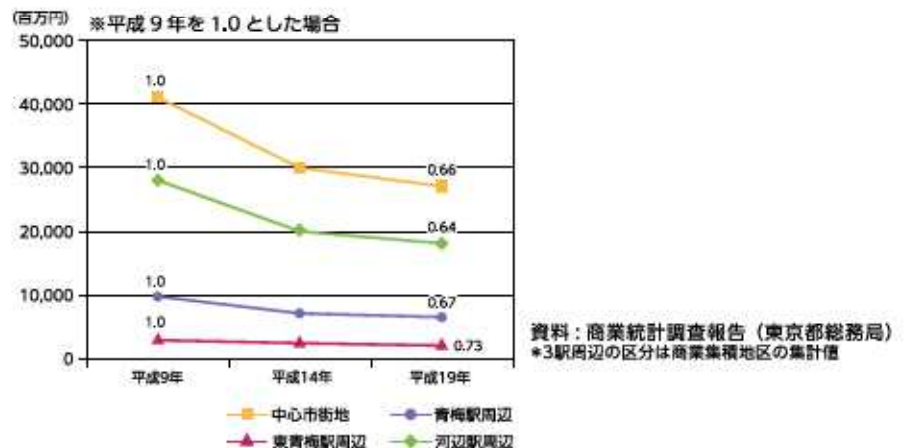


図1-15 中心市街地と3駅周辺の小売年間販売額の推移



## イ 工業

近年の経済情勢の影響で、事業所数、従業者数、製造品出荷額などはともに減少しています。工業団地に集積する電気機械製造業の大企業を中心とした産業が、本市工業の中心となっていますが、市全体で見ると9割は従業者30人未満の中小企業です。

図1-16 工業の事業所数、従業者数、製造品出荷額等の推移(4人以上の事業所)



図1-17 産業分類別の製造品出荷額等(平成22年)

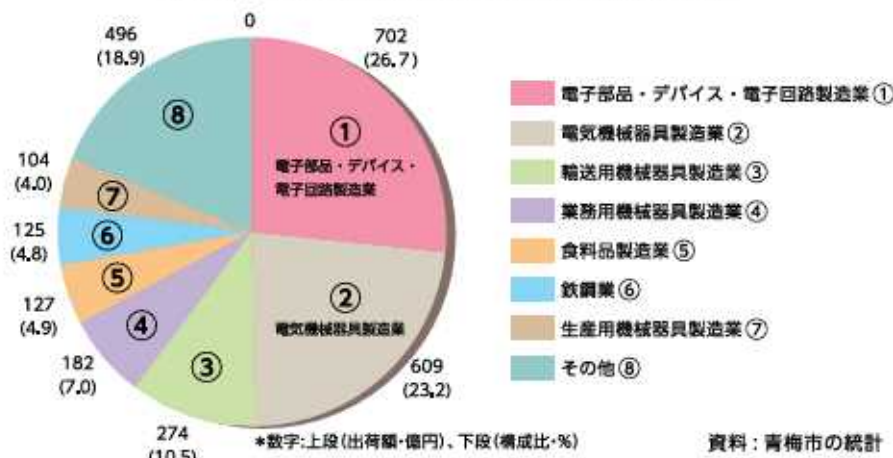
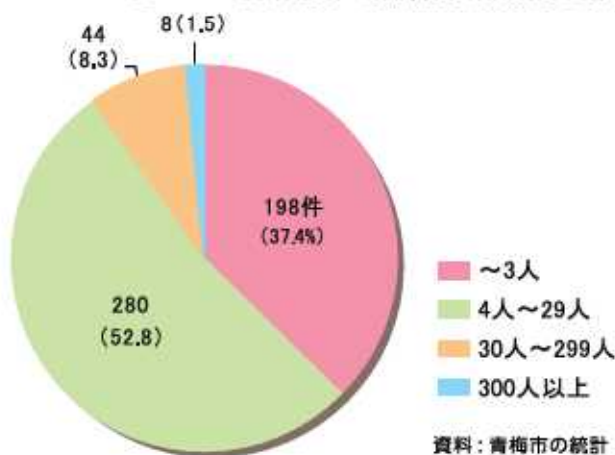


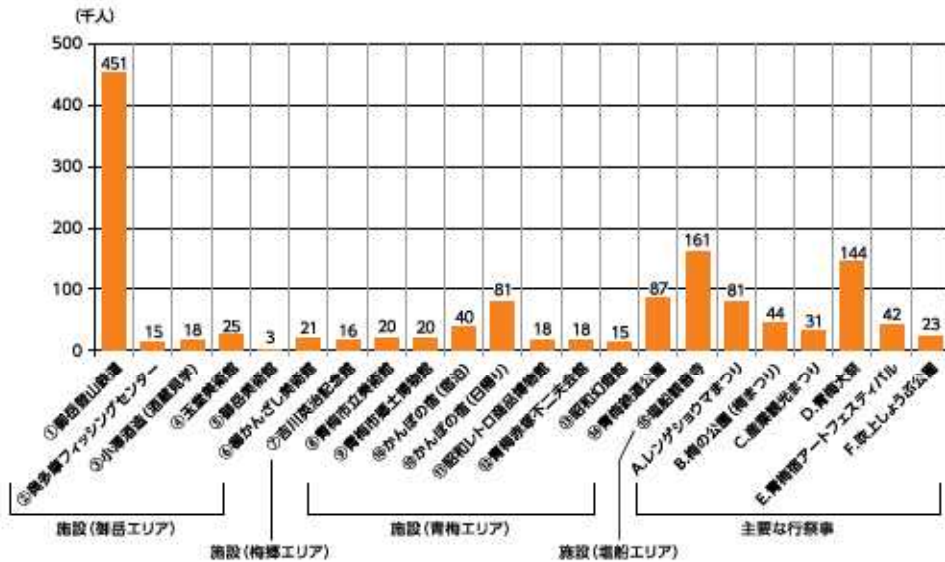
図1-18 従業者数の規模別事業所数(平成20年)



## ウ 観光

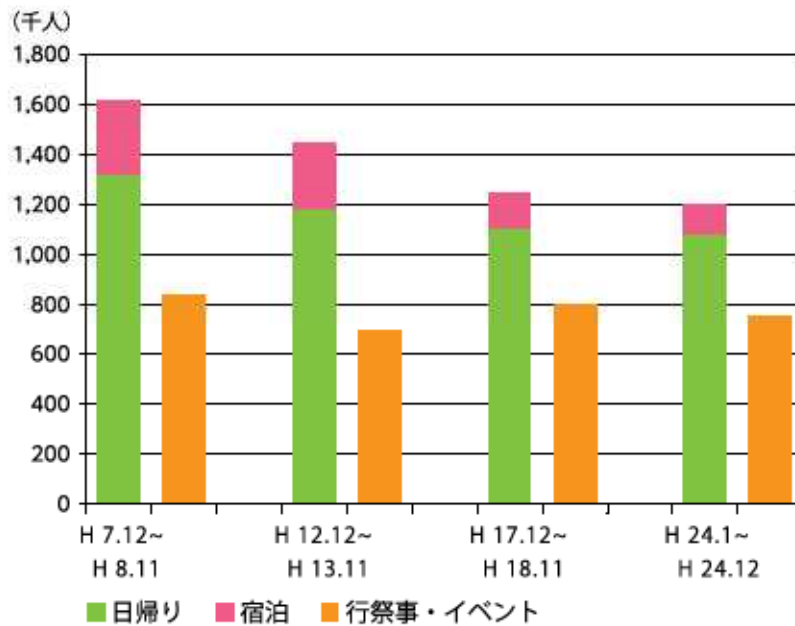
主要な施設・行祭事の来訪者数は、御岳山の登山客が圧倒的に多いのが特徴となっていますが、年間入込客数は近年減少傾向にあります。

図1-19 青梅市の主要な施設・行祭事の来訪者数(平成22年度)



資料：青梅市の統計

図1-20 青梅市の年間入込観光客数推定値の推移



資料：西多摩地域入込観光客数調査報告書(西多摩地域広域行政圏協議会)

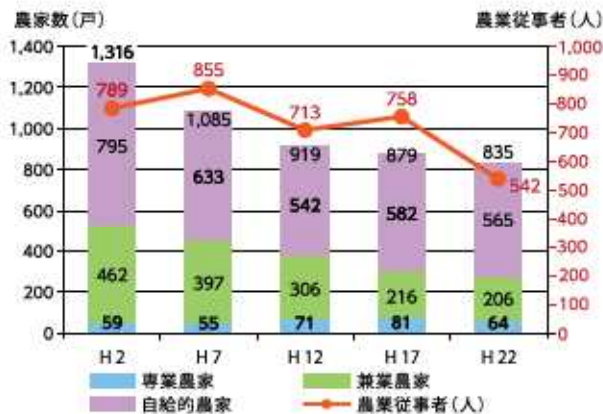


## 工 農林業

農業は、農家数、農業従事者数、経営耕地面積とも減少傾向が顕著です。農家の大半は自給的農家で、販売農家は3割程度であり、中でも専業農家は平成22年で64戸と8%程度に過ぎません。

森林面積6,522haのうち民有林が97%の6,318haを占めています。林業従事者は減少傾向にありますが、直近の5年間では増加に転じています。

図1-21 青梅市の農家数および農業従事者の推移



資料：青梅市の統計、国勢調査（総務省）

図1-22 青梅市の経営耕地面積の推移



資料：青梅市の統計

表1-1 青梅市の農業産出額

(千万円)				
総額	米	野菜	果実	花き
109	1	92	10	2

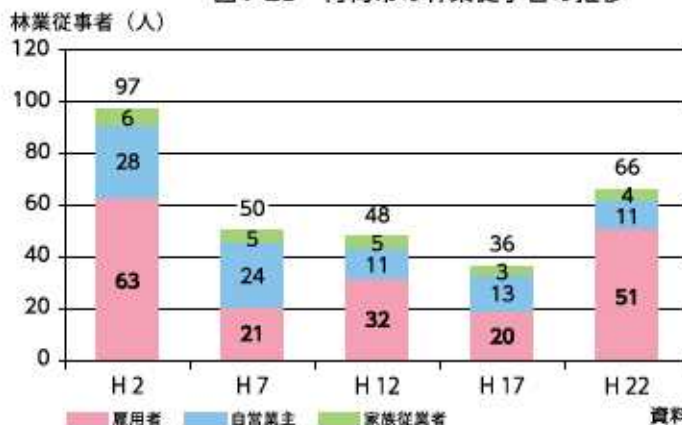
資料：農業委員会活動整理カード  
(全国農業会議所)  
\*平成25年4月1日現在

表1-2 青梅市の所有形態別林野面積

	国有林	公有林	民有林	合計
面積(ha)	36	168	6,318	6,522
構成比(%)	0.6	2.6	96.8	100.0

資料：2010 世界農林業センサス  
(農林水産省)

図1-23 青梅市の林業従事者の推移



資料：青梅市の統計、国勢調査（総務省）

## (4) 市民交通流動

### ア 通勤・通学流動

通勤・通学流動は、平成22年現在、流出人口36,690人、流入人口22,110人であり、流出超過になっています。

流入・流出の都市では、通勤においては流出入ともに羽村市とのつながりが強く、流入についてはあきる野市など周辺市からの一定の流入がみられます。

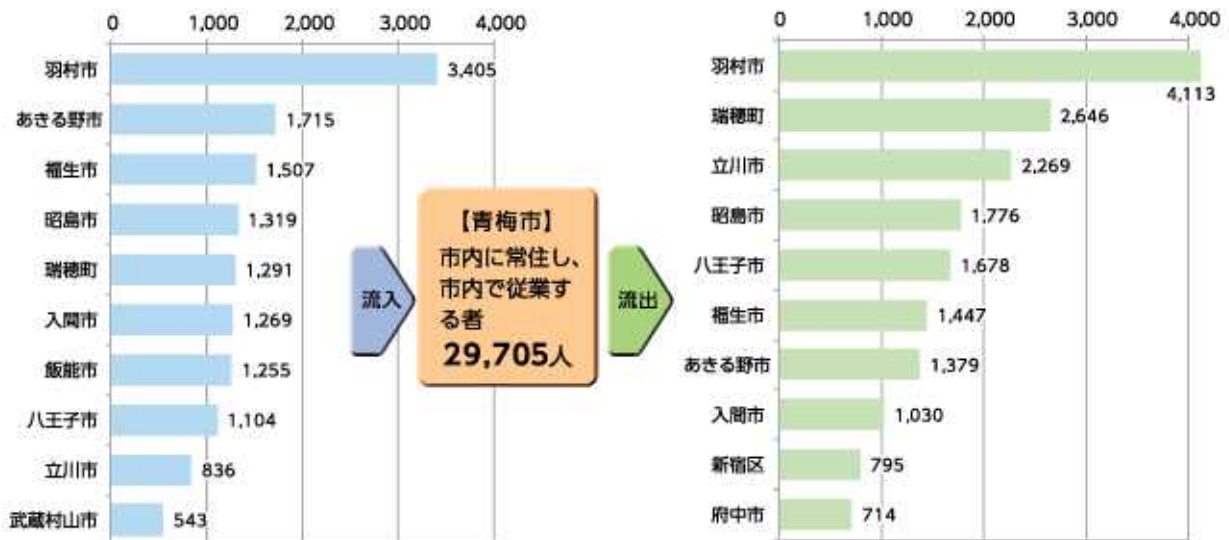
表1-3 通勤・通学流動の推移

	常住地による 就業・通学者数 (人)	流出		従業・通学値 による就業・ 通学者数 (人)	流入		就業・通学者 比率 (従/常) (%)
		就業・通学者数	流出率		就業・通学者数	流入率	
		(人)	(%)		(人)	(%)	
平成17年	76,710	38,729	50.5	62,176	24,195	38.9	81.0
平成22年	67,896	36,690	54.0	53,316	22,110	41.5	78.5

\*対象15歳以上  
常住地による就業・通学者:青梅市を常住地とする就業者・通学者  
従業・通学地による就業・通学者:青梅市を従業地・通学地とする就業者・通学者

資料: 国勢調査(総務省)

図1-24 通勤の流入・流出状況(平成22年)



\*対象15歳以上、上位10都市

資料: 国勢調査(総務省)

## イ 公共交通の利用状況

### 【鉄道】

市内には、JR青梅線のほか、御岳登山鉄道が通っています。JR青梅線の青梅駅から立川駅までの所要時間は約30分です。

市内の駅では、年間乗車人員はJR河辺駅が最も多く、河辺駅、東青梅駅の利用者数は横ばい、青梅駅は減少傾向にあります。東部地域の一部は、隣接する羽村市・小作駅の駅勢圏\*に含まれ、利用者が多くいます。

図1-25 JR青梅線の主要駅の年間乗車人員の推移



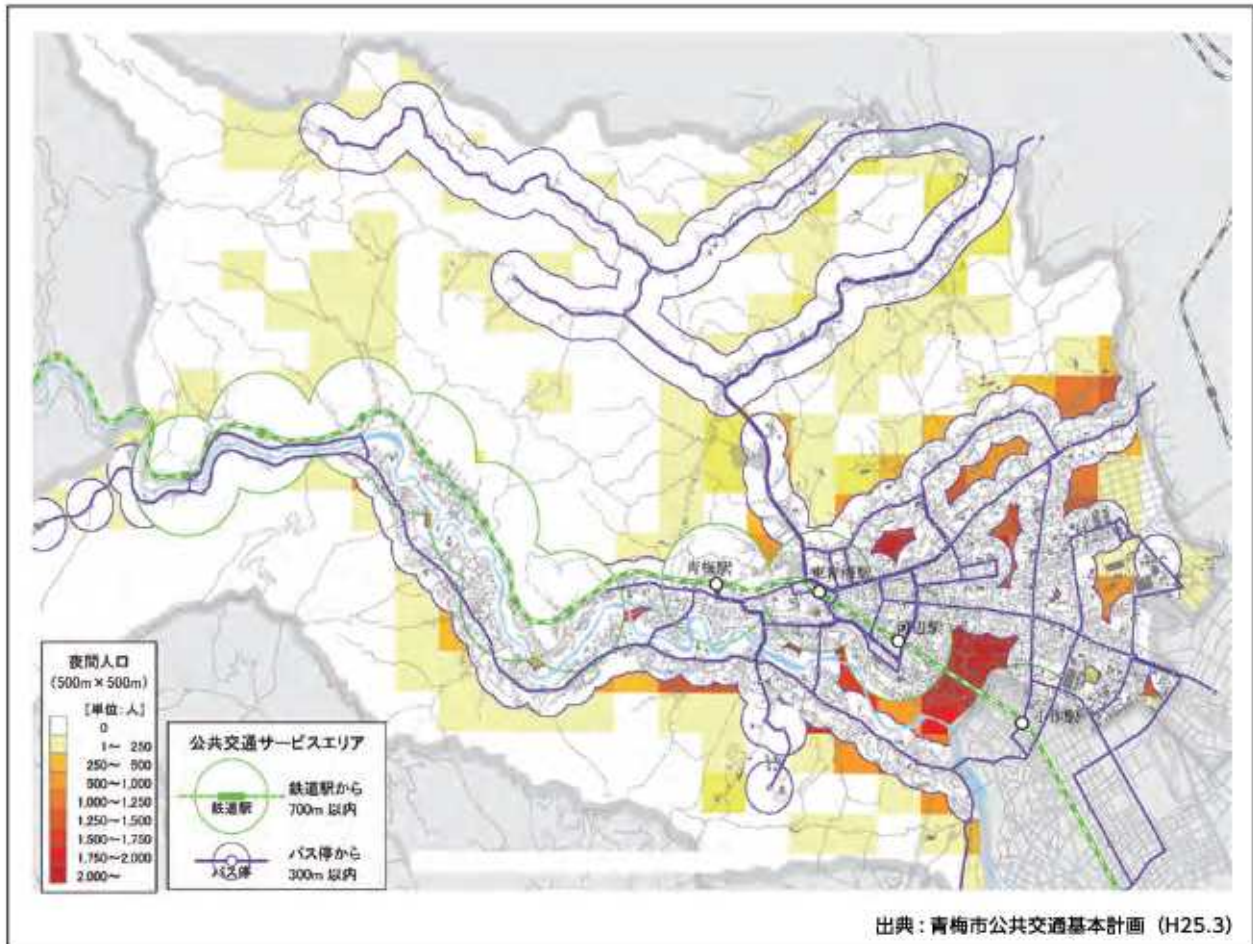
JR青梅線

## 【バス】

市内のバス路線網は、主に青梅駅、東青梅駅、河辺駅、小作駅を起終点とし、市街地内や市街地と郊外部を結ぶ路線が配置されていますが、山間部や市街地部の一部には、バスや鉄道の公共交通空白地域が分布しています。

公共交通に関するアンケート調査の結果では、外出時の移動で不便を感じている人が市内に24%ほどおり、不便を感じている移動目的は、買物・病院となっています。

図1-26 サービス圏域による公共交通空白地域



## (5) 面的整備と都市施設の整備状況

### ア 面的整備

昭和40年代を中心に、9地区において土地区画整理事業<sup>\*</sup>が実施され、特に東部の平地部一帯は面的整備が進んでいます。このうち、青梅東部新町土地区画整理事業<sup>\*</sup>区域では、2地区に地区計画を定め、良好な居住環境を誘導しています。

東青梅駅南口では、公共施設整備と合わせ、潤いのある駅前のまちづくりに向けた市街地再開発事業<sup>\*</sup>が行われています。（平成9年完了）



## イ 都市施設

### 【道路】

都市計画道路は、東部の土地区画整理事業\*区域内を中心に整備率は75%で、現在は主に多摩川を挟む東西方向の幹線道路のほか、青梅駅や東青梅駅周辺の南北道路を整備中です。

土地区画整理事業\*区域以外の区域の生活道路は、狭あい道路せまあいが多く残っています。

青梅街道や奥多摩街道でやや交通量が多く、多摩川を渡る多摩川橋や青梅インターチェンジのアクセス道路となっている岩蔵街道の一部区間では混雑度が高くなっています。

採石場が分布する成木地区の一部で大型車混入率が30%を超えています。

図1-28 道路の交通量、混雑度

○ 道路交通量、混雑状況



※「道路の交通量」(昭和59年(社)日本道路協会)による混雑度の考え方  
 混雑度1.00未満:「昼間は時刻を通して、道路が混雑することなく円滑に走行できる。渋滞やそれに伴う極端な遅れはほとんどない。」  
 混雑度1.00～1.25:「道路混雑する可能性がある時間が1～2時間(ピーク時間)ある。何時間でも混雑が連続する可能性は極端に小さい。」  
 混雑度1.25～1.75:「ピーク時間をもとより、ピーク時間を中心として混雑する時間帯が加度的に増加する可能性の高い状態で、ピーク時の混雑から日中の連続的混雑への過渡状態。」

出典:青梅市公共交通基本計画(H25.3)

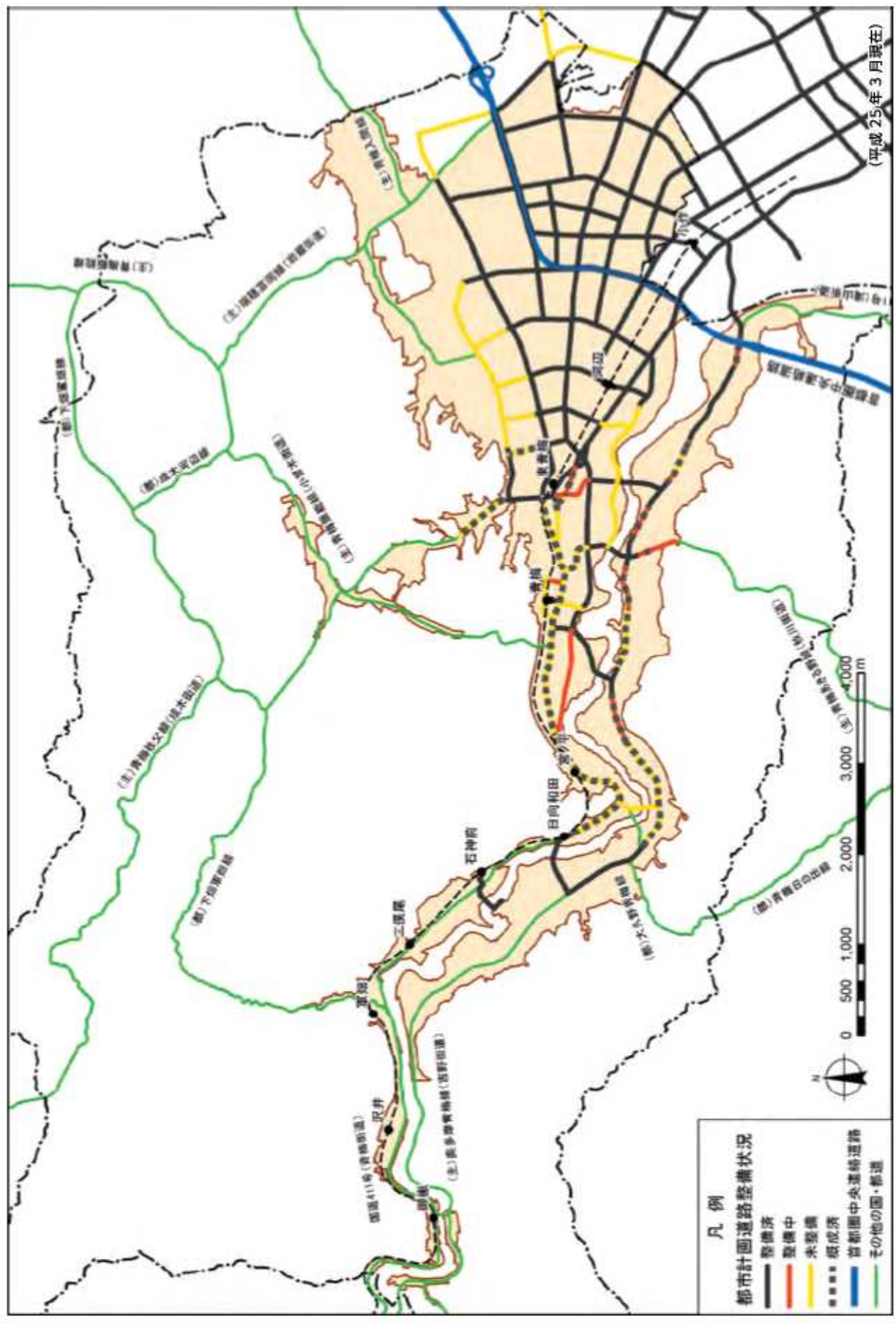
図1-29 大型車混入率

○ 大型車混入率



出典:青梅市公共交通基本計画(H25.3)

圖1-30 都市計畫道路整備狀況圖



## 【公園・緑地】

都市公園・緑地は、97箇所(都市計画公園・緑地46箇所含む)あり、計画面積約136haのうち約59haが供用開始されています。

公園緑地などの分布状況を見ると、都市公園のほとんどが市街化区域にあり、都市公園の少ない市街化調整区域には、児童遊園などが分布しています。

多摩川の河岸段丘上に連続して残る崖線緑地\*は、市街地の良好な都市環境を形成する貴重な緑地であり、一部の保全が進んでいますが、緑地の減少やマンションの立地も目立ちます。

青梅の森特別緑地保全地区\*は、「青梅の森事業計画」にもとづき、自然環境や生物多様性\*に配慮しながら、市民が自然とふれあえる場としての活用が図られています。

生産緑地地区\*の指定面積は、平成15年から24年の10年間で、156haから144haと8%減少しています。これは、相続などを契機に農地転用が行われ、戸建住宅などが建設されたものです。

表1-4 公園緑地の整備状況

公園緑地等の分類		供用		未供用含む*2	
		箇所数	面積(m <sup>2</sup> )	箇所数	面積(m <sup>2</sup> )
都市公園法・パリアフリー法 条例委任の適用公園	都市公園	95	591,580	97*3	1,358,071
	市民一人あたりの*1都市公園の面積	4.3m <sup>2</sup> /人		9.8m <sup>2</sup> /人	
	都市公園以外の公園(青梅市公園条例)	5	105,804	5	105,804
	児童遊園(青梅市児童遊園条例)	50	39,814	50	39,814
	その他条例等による公園	3	102,814	3	102,814
	条例以外の公園	8	25,869	8	25,869
	小計	161	865,882	163	1,632,372
	市民一人あたりの*1都市公園法・ パリアフリー法条例委任の適用公園の面積	6.3m <sup>2</sup> /人		11.8m <sup>2</sup> /人	
その他の 公園 緑地等	運動広場	80	177,356	80	177,356
	その他の公園	4	20,126	4	11,027
合計		245	1,063,364	247	1,820,755
市民一人あたりの*1公園緑地等の面積		7.7m <sup>2</sup> /人		13.2m <sup>2</sup> /人	

\*1 平成25年4月1日現在の人口:138,431人

\*2 都市計画決定しているものの供用をしていない未供用を含む公園緑地等のこと。なお、未供用の区域は、現状を保全することで、緑地としてのオープンスペースの機能や公開性、永続性の確保を図るほか、本計画の計画期間に限定せず、将来的に公園整備を進める予定の区域となっている。

\*3 物見塚公園、新町緑地を含む。

出典：青梅市緑の基本計画 (H26)

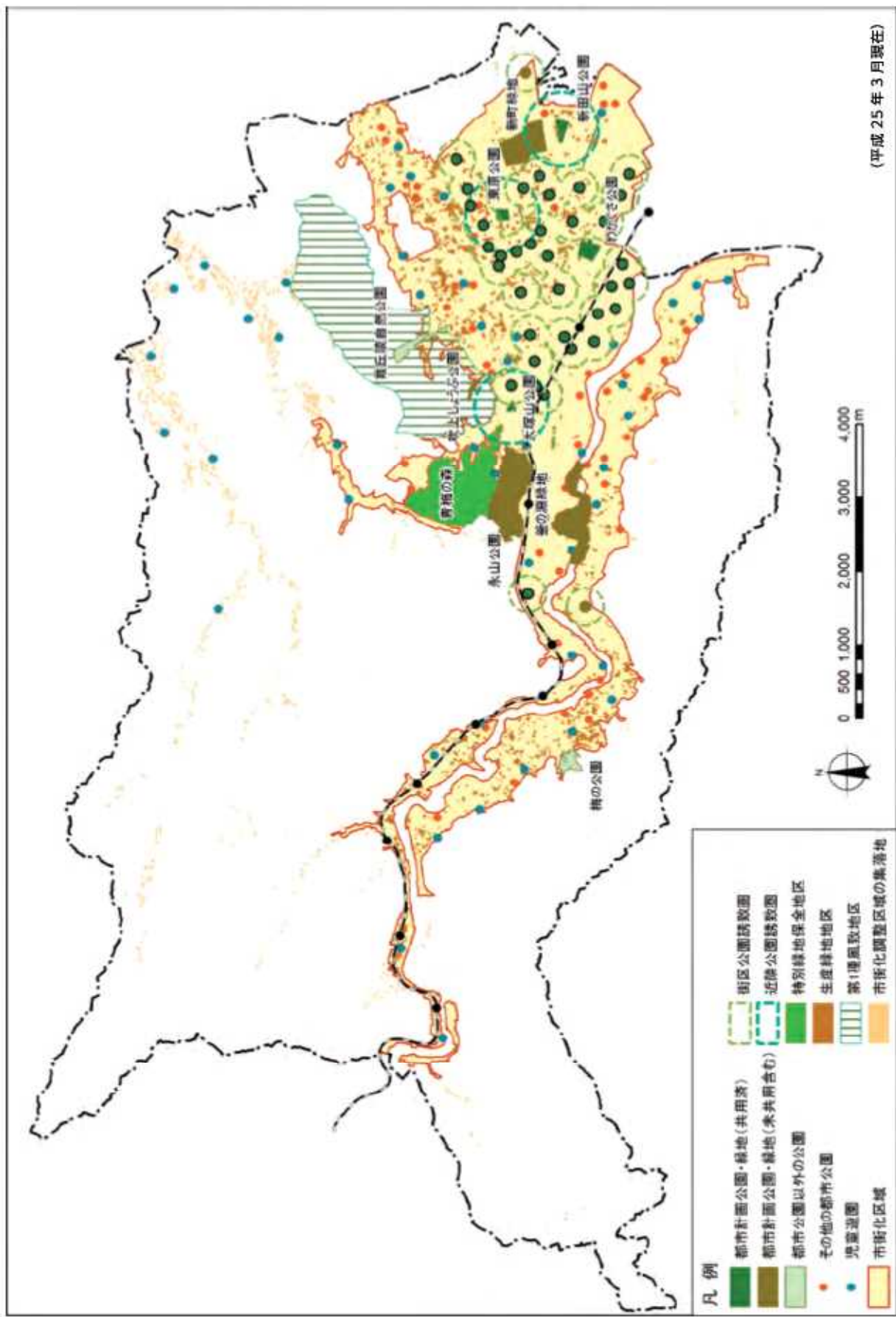
図1-31 生産緑地地区の推移



資料：青梅市



図1-32 公園緑地の整備状況図



## 【下水道・河川】

公共下水道は、多摩川流域下水道多摩川上流処理区関連公共下水道(分流式)として、昭和47年から事業に着手しました。汚水事業については、公共下水道計画区域面積の2,459haを都市計画決定し、平成24年度末における供用開始面積は、約2,049haとなりました。現在は、御岳・沢井・二俣尾・柚木町地区や黒沢・小曾木・富岡地区などの未普及地域で整備を進めています。

雨水事業については、浸水の可能性がある東部地域で集中的な整備を進め、流域下水道多摩川上流(雨水)幹線や霞台放流渠を整備し、浸水被害を解消してきました。

また、多摩川水系、荒川水系に属す多くの河川は、治水機能の向上などの整備が進められています。霞川については、平成4年に都県境の金子橋から5.5kmが都市計画決定され、平成18年度に霞川調節池が完成し、その上流の河川改修が進められています。



霞川調節池

图 1-33 公共下水道污水整備状況图

